週刊 武四郎

第28号
2018年(平成30年)10月17日(水)
発行・松阪市

●毎月第三週は、
松浦武四郎のお友達に
ついてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

川喜田石水と半泥子

武四郎さんの人生前半の全国放浪時代、あるいは自費で蝦夷地探検をしていた時代、旅費は得意の篆刻で稼いでいたとはいえ、本当にそれだけでよく旅が続けられたと思います。

どうやら背後には、パトロン……というか金銭的に援助してくれる人がいたようです。

津の豪商、川喜田久太夫。

津の川喜田家といえば、日本橋に江戸店を構えた伊勢商人を代表するような大店でした。この川喜田家の十四代川喜田久太夫（号石水）は、武四郎さんの幼なじみで生涯を通しての親友だったのです。

武四郎さんは、この石水と津の平松楽斎塾で知り合ったようです。武四郎さんが十四、五歳くらいの時でしょうか。

武四郎さんは旅に出ると行く先々で石水に手紙を書きました。武四郎にとっては出資者に対する報告書でもあり、また自分の身に何かあった時のデータのバックアップ的な意味もあったのかもしれません。当時の世情、町の様子を克明に記した武四郎さんのレポートは、石水にとっても店を支えていく上で重要な情報であったことでしょう。

やがて二人は歳を取り、石水が手紙に「片鬢に白いものが出てきた」と書けば、武四郎も「わしは両鬢に白髪が出てきたよ」などと書き送っています。二人の友情は石水が明治十二（一八七九）年に亡くなるまで続きました。

現在も残っている武四郎さんの手紙の多くはこの石水宛で、それはのちに石水の孫の川喜田半泥子がお祖父さんの石水の遺徳を偲んで建立した石水博物館（津市）に蔵書や関係書類と共に大事に保管されていたものです。半泥子は、この石水博物館を造るにあたって、武四郎さんのネックレスなどのコレクションを所蔵している静嘉堂文庫をお手本にしたといわれています。この石水の孫の川喜田半泥子は、のちに「東の魯山人、西の半泥子」と並び称される陶芸家になりますが、本業はあくまでも川喜田家の〈第百五銀行頭取〉として人生を全うしたのでした。

松浦武四郎（1818～1888）
三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地（今の北海道）を６度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として〈北海道〉のもととなる〈北加伊道〉を含む６案を政府に提案したことから〈北海道の名付け親〉と称される。

文・河治和香　装画・りんたろう　編集・細山田正人　デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』（河治和香著）が、小学館より好評発売中！